

東国文化自由研究レポート



研究テーマ

古墳時代に音楽文化は
存在していたのか。

提出日 2024年 8月 26日 (月)



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 2 組 30 番

氏名 村上 大祐

1、きっかけ

私は普段、音楽を聴くのが好きです。音楽を聴いていると、辛い時でも、元気が出てきます。また、勉強をしなくちゃいけないのに、やる気が出ないというときでも、楽しい音楽を聴くと、自然と集中力が上がり、あっという間に課題が終わります。私は、毎日のように、自分の好きな音楽を聴いているのですが、ある日、音楽を聴いている時に、1つの疑問が頭に浮かんできました。それは、古墳時代に、音楽は存在していたのだろうか、ということです。もし存在していたのであれば、どんなことに使われていたのだろうか。どんな楽器を使っていたのだろうか。楽器は、どのような材料で作っていたのだろうか。と、さらに疑問が次々に浮かんできました。そこで、私は、これまであまり触れられてこなかった、古墳時代の音楽文化について調べることにしました。

2、予想

まず、古墳時代に音楽文化は存在していたのでしょうか。私は古墳時代に音楽文化は存在していたと考えています。なぜなら、古墳を築くための儀式や、農作物の豊作を願うまつりなどが行われていたのなら、その儀式やまつりで音楽が使用されていたのではないかと考えたからです。

もし、古墳時代に音楽文化が存在していたとしたら、古墳時代の人々はどのような楽器を使用していたのでしょうか。私は古墳時代の人々が、木の実などの植物を採取していたことから、楽器には、木材が多く使用されていたのではないかと考えています。さらに、縄文時代に作られた土偶や土器が粘土や泥からできていたことから、古墳時代の楽器は木材、粘土、泥のいずれかで作られたのではないかと考えています。

音楽文化が古墳時代の人々に与えた影響とはどんなものだったのでしょうか。私は、古墳時代の人々は、儀式やまつりなどで音楽を用いていたのではないかと予想しました。儀式の際には、音楽は場を静め、清める役割や、儀式の開始や進行の合図として重要な役割だったのではないかと考えています。まつりの際に音楽は、雰囲気盛り上げ、人々の交流の場を作っていたと考えられます。以上のことから、音楽は人々の生活にさまざまな影響を与えていたと考えています。

私が予想したことをまとめると、



土偶



縄文土器

- 1、古墳時代から音楽文化は存在していた。
- 2、当時の人々は、木、粘土、土から作られた楽器を使用していたのではないかな。
- 3、音楽は儀式やまつりで用いられていたのではないかな。
- 4、音楽は儀式の際に場を静め、清める役割をしていたのではないかな。
- 5、音楽は儀式の開始や進行の合図として重要な役割だったのではないかな。
- 6、音楽はまつりの際に雰囲気を盛り上げ、人々の交流の場を作っていたのではないかな。

3、調査方法

- ① かみつけの里博物館(高崎市)で、古墳時代の音楽文化について調べる。
- ② 本やインターネットで、儀式と音楽の関係について調べる。
- ③ 八幡塚古墳に行き、古墳時代の儀式の様子を表した埴輪を見る。
- ④ 本やインターネットで、古墳時代の人々が使用していた楽器について調べる。
- ⑤ 古墳時代の人々が使用していた楽器を実際に作ってみる。



(2024年8月14日訪問)

4、調査

① 古墳時代の音楽文化について

古墳時代に音楽文化は存在していたのでしょうか。予想では「古墳時代から音楽文化は存在していた」と考えました。私は、高崎市にある「かみつけの里博物館」に行き、調査をしました。駐車場に入ろうとした時、大きな古墳が見え、とてもウキウキしました。この古墳は八幡塚古墳という名前の古墳でした。館内に入り見学していると、古墳時代の音楽文化に関わるあるものを発見しました！なんと、実際に古墳時代の人々が使っていたと思われる楽器が展示されていたのです。そこには、なんとびっくり！琴が展示されていました！これには驚きを隠せませんでした(写真1の左のもの)。現在も日本の伝統楽器である琴が古墳時代から演奏されていたなんて驚きました。私は以前、小学校の音楽の授業で琴を演奏したことがあります。展示されている琴よりも遥かに大きかったです。古墳時代の人々は膝の上に乗せて演奏していたのかもしれない。また、「ササラ子」のようなものも展示されていました(写真1の上のもの)。古墳時代の楽器が展示されているということで、古墳時代の人々は琴などの楽器を演奏していたということがわかりました。すなわち、古墳時代に音楽文化は存在していたと考えられます。さらに、見学を続けていると、なんと、琴を弾く埴輪を発見しました！(写真2)やはり、当時の琴は、膝の上で演奏していたようです。このコーナーでは「保渡田VII遺跡」から出土した埴輪群像が展示されています(写真3)。この埴輪群像は、王が主催する当時の重要な儀式の様子を表し、王から民衆へ何らかのメッセージを込めて造形され、配置されたと考えられているようです。このことから、儀式に音楽が用いられていた可能性が考えられます。



写真1

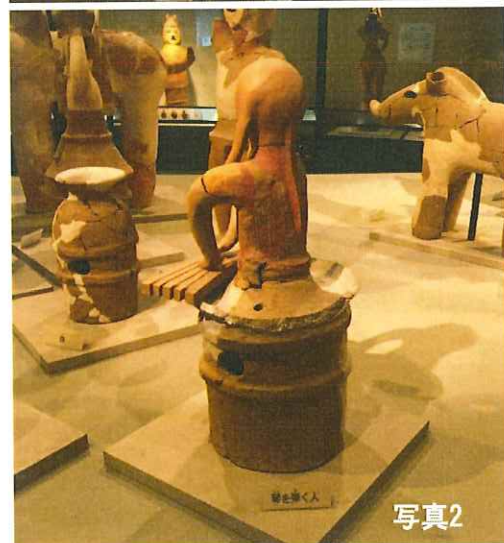


写真2

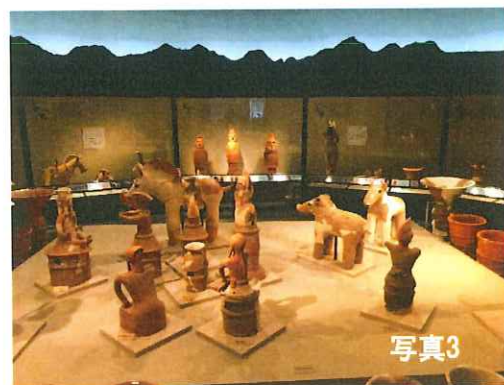


写真3

- 1、古墳時代から音楽文化は存在していた。
 - 2、儀式に楽器が使用されていた。
 - 3、儀式に音楽が用いられていた可能性がある。
- 今回の調査でこの3つがわかりました。

そこでさらに、儀式と音楽の関係について調べていこうと思います。

② 儀式と音楽の関係について

前回の調査で、儀式に音楽が用いられていたことがわかったので、今回は、儀式と音楽の関係について調べていきたいと思います。かみつけの里博物館で儀式について紹介されているコーナーがあったので、見学しました。展示されている儀式の場面を見学していると、なんと、儀式の中で琴を演奏する埴輪を見つけました！（写真4）これは一体、どのような儀式の場面なのでしょう。解説には「はにわ群の中心となる場面です。王が巫女と向かい合い、巫女が王に器を差し出しています。まわりには、王族、琴を弾く人、奉仕する女性などがいて、何かの儀式の様子を表現しているようです。」と書かれていました。このことから、儀式に音楽が用いられていたことがわかりました。私は、さらに詳しくこの儀式について調べてみることにしました。調べた結果、この儀式は、王の館である三ツ寺遺跡で行われていた「水取りの儀」という神聖な水に感謝し豊作を願う最も重要な儀式だったことがわかりました。最も重要な儀式で音楽が使われていたということは儀式の際に音楽は重要な役割だったのではないかと考えられます。

八幡塚古墳に当時の様々な儀式の様子を復元したコーナーがあると知り、実際に見てきました。見学をしていると、館内に展示されていたものと同じ儀式をしている埴輪がありました。手前には琴を演奏する埴輪もありました。琴を弾く人が埴輪で残されているということは、重要な役割だったと考えられます。他の儀式を見ている中で、私はある大発見をしました。それは、鳥のような埴輪の首に鈴がついていたということです！（写真6）え！？これには驚かされました！この埴輪から当時、鈴が作られていたことがわかります。もしかしたら、鈴も楽器として使用されていたかもしれません。次は、当時の楽器について調査をしようと思います。

この調査で、王の儀式に音楽が用いられていたことがわかりました。



写真4



写真5



写真6

③ 当時の人々が使用していた楽器について

(1) 琴について

琴は当時の儀式でどのような役割だったのでしょうか。「かみつけの里」の楽人埴輪(楽器を奏でる人)の説明パネルには、「楽器を演奏する人を表した埴輪は、琴を弾く人が最も多い。琴は貴人(きじん)が神のお告げを聞くときの道具だと推定されている。」と書かれていました。また、琴が展示されていた展示パネルに「神の心を占う琴」と書かれていました。

次に、琴を弾く埴輪について考えていきます。

右の写真7は、前橋市朝倉町から出土した埴輪男子倚像(きぞう)です。この埴輪は、国指定重要文化財に指定されています。膝の上に乗せているのが琴です。見て分かる通り、当時の琴は現在の琴よりも小さかったことがわかります。この琴は4本の弦があるそうです。このことから、当時、実際に使われていた琴も4弦だったと考えられます。そのため、現在の琴よりも奏でられる旋律は少なかったと考えられます。ここで私は当時、琴がどのような旋律を奏でていたのかが気になりました。当時の人はどのようなメロディーで神の心を占っていたのでしょうか。私は、かみつけの里博物館の学芸員さんに、当時の人が琴で奏でていた旋律について聞いてみることにしました。すると、学芸員さんは、「埴輪からは、当時の人々がどんな旋律を奏でていたかはわからないんです。当時の楽器も使われていた材料が腐ってしまい、ボロボロになってしまうため、楽器からもどんな旋律を奏でていたかはわからないんです。」と話してくれました。当時の人々が奏でていた旋律がわからないのはとても残念でした。この学芸員さんの話から、当時の人々が奏でていた旋律については不明だということがわかりました。

ところで、儀式の際に琴を弾く人は一体どんな人だったのでしょうか。当時、儀式の際に琴を弾く人は王に準じた立派な身なりの男が多く、王族や重臣などが務めることが多かったと考えられています。

- 1、琴は当時の儀式の際に重要な道具として使用されていたと考えられる。
- 2、当時、人々が琴でどのような旋律を奏でていたかはわからない。
- 3、琴の弦の本数が少なかったことから、奏でられる旋律は少なかったのではないかと考えられる。
- 4、琴の演奏者は、王族や重臣などが務めることが多かったと考えられている。

以上のことが今回の調査でわかりました。



写真7

(2) 土鈴について

かみつけの里博物館を見学した際に、受付の近くにあった一冊の本が気になりました。それは、かみつけの里博物館が発行している、「鈴ーよみがえる古墳時代の響きー」という本です。この本には、古墳時代の様々な鈴について書かれていました。私はこの本を母にお願いし、買ってもらうことにしました。家に帰ってじっくり読んでみると、「土鈴」という土でできた鈴について関心を持ちました。

当時、土鈴とはどのようなことに使用されていたのでしょうか。調べてみると土鈴はムラから発見されており、まつりに関わる道具として使われていたのではないかと考えられているそうです。

土鈴は群馬県の遺跡からも発見されています。土鈴の多くが集落の住居跡から発見されていて、群馬県では、7遺跡から8例の土鈴が発見されています。全国的にも土鈴の出土例は少なく30例に満たないそうです。当時の土鈴の材質は土師質(はじしつ)のものと須恵質(すえしつ)のものに分かれ、ほとんどは土師質のものです。まず、須恵質の土鈴について調べていこうと思います。須恵質の土鈴として、高崎市にある多比良追部野遺跡から出土した土鈴があげられます。(写真8)この土鈴は持ち手があり、大きく口を開け、鈴内部に須恵質の丸い玉が入っています。振るとコロコロとした音が響くそうです。



写真8

次に土師質の土鈴について調べていこうと思います。調べてみると土師質の土鈴はいくつかの群馬県の遺跡から発見されていることがわかりました。その1つの反丸遺跡から出土した土師質の土鈴(写真9)について詳しく調べていこうと思います。この土鈴は巨大集落の竪穴住居建物跡から出土したそうです。洋ナシのような形状をしています。上部が欠けていたことから紐がついていたと推定されています。X線透過で、内部には4つの丸が入っていて、このうち2つは石、2つは土師質の丸ということがわかったそうです。カラカラと軽い音がしますが、この土鈴は口がないそうです。今回、須恵質と土師質の2つの土鈴について調べましたが、同じ土鈴でも作りが違っていたり、中に入っている玉の数も違うことから、当時の人々は同じ土鈴でも作り方や玉の数を変え、いろいろな音を楽しんでいた、または使い分けていたのではないかと考えられます。



写真9

私は当時の人々が聴いていた音を聞きたいと思い、実際に土鈴を作ってみることにしました。材料は百均で購入できる素焼き調粘土を使用しました。今回作る土鈴は、多比良追部野遺跡から出土した土鈴(写真8)に似た、口が空いている土鈴を作ります。作り方は以下のとおりです。

1、ねんどで丸を作る



2、丸を新聞紙でつつむ



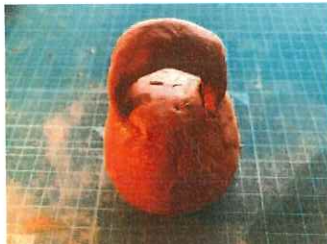
3、新聞紙をねんどでつつむ。



4、切り込みを入れる



5、つまみをつける



～完成～



最後の写真が完成した土鈴です。よくできたのではないのでしょうか。作ってから数日間、乾かしました。触ってみたところ、乾いていたので、中の新聞紙を燃やしてみることにしました。燃やそうとしたのですが、なかなか新聞紙に火が付きませんでした。外は乾いていたものの、爪楊枝で指してみると、内部の粘土はまだ柔らかく、乾いていませんでした。また、厚く作りすぎてしまったため、内部の玉との隙間があまりなく、空気が通っていなかったことがわかりました。そこで、さらに何日間か乾かすことにしました。3日後、爪楊枝で確認すると、しっかりと乾いていました。しかし、内部に空気が通っておらず、火がつかないので内部の新聞紙をピンセットやハサミを使い、取り出すことにしました。苦戦しながらも、なんとか新聞紙をすべて取り出すことに成功しました。内部の玉は形が変わってしまい、作ったときよりも小さくなってしまいましたが、振ってみると「カラカラ」と音が鳴りました。(QRコードを読み込むと音が聴けます。)これが当時の人々が聴いていた音に近い音なのだと感動しました。今回、実際に土鈴を作ってみましたが、新聞紙が燃えずかなり苦戦しました。当時の作り方は調べてもわかりませんでした。新聞紙はなかったもので、枯れ葉を入れて作るなどの様々な作り方があったと考えられます。また、多比良追部野遺跡から出土した土鈴(写真8)を見ても分かる通り、かなりきれいな形をしています。当時は、職人などがいたのかもしれませんが。



〈作った土鈴の音〉

- 1、土鈴は、群馬県の遺跡からも発見されている。
 - 2、土鈴の多くは住居跡から発見されている。
 - 3、まつりの道具として使用されていたと考えられている。
 - 4、土鈴には須恵質と土師質の2つがある。
 - 5、土鈴の作り方や玉の数が違うことから、当時の人々は様々な音を楽しんでいたのではないかと考えられる。
 - 6、多比良追部野遺跡から出土した土鈴の形が整っていることから、当時は、職人が作っていたのではないかと考えられる。
- 以上のことが今回の調査でわかりました。

(3) 太鼓について

ここまで、琴と土鈴について詳しく調べてきましたが、次は、太鼓について詳しく調べていこうと思います。かみつけの里博物館の学芸員さんに琴について話を聞いた際に、当時の音楽について書かれた資料をいくつか持ってきてくださいました。その資料に載っていた太鼓を打つ埴輪について興味を持ったので調べてみることにしました。太鼓を叩く埴輪は、伊勢崎市にある天神山古墳から出土したそうです。この埴輪は、東京国立博物館に所蔵されています。機会があったら実際に見に行きたいです。このような、太鼓を叩く埴輪は、全国的にも少ないそうです。太鼓を叩く埴輪が出土したことから、当時の人々は太鼓を使用していたことがわかりました。では、どのようなことに使用していたのでしょうか。私は、太鼓は現代のまつりで使用されているように、当時もまつりの道具として使用されていたのではないかと考えています。



写真10

学芸員さんが持ってきてくださった資料に太田市の塚廻り古墳群第4号墳から出土した「踊る巫女」の写真が載っていました。(写真11)学芸員さんはこの写真を指で指して、「琴や太鼓の演奏に合わせて踊っていたのかもしれないですね～」と話してくださいました。この学芸員さんの話には私は思わず、「なるほど～」と言ってしまいました。現代のまつりでも、音楽に合わせて踊ったりして、楽しんでいます。それと同じで、当時のまつりでも、音楽に合わせて人々は踊っていた可能性が考えられます。



写真11

- 1、太鼓を叩く埴輪が伊勢崎市にある天神山古墳から出土した。
- 2、全国的にも太鼓を叩く埴輪は少ない。
- 3、当時の人々は太鼓を使用していた。
- 4、まつりに使用していたと考えられる。
- 5、太田市の塚廻り古墳群第4号墳から「踊る巫女」が出土したことから、当時の人々は、音楽に合わせて踊っていたのではないかと考えられる。

以上のことが今回の調査でわかりました。

5、結論

これまで調べてきたことから、古墳時代に音楽文化は存在していたということがわかりました。その根拠として、4つ挙げられます。

1つ目の根拠は、王の儀式に琴が用いられていたということです。儀式の際に、琴は「神の心を占う道具」として使用されていました。このことから、琴は当時の儀式の際に重要な道具として使用され、王族や重臣などが琴の演奏者を務めることが多かったと考えられています。当時、人々が琴でどのような旋律を奏でていたかはわかりませんが、琴の弦の本数が少なかったことから、奏でられる旋律は少なかったのではないかと考えられます。

2つ目の根拠は、土鈴という土製の鈴が、群馬県の高井良追部野遺跡や反丸遺跡などの居跡から発見されているということです。土鈴はまつりの道具として使用されていたと考えられています。土鈴には須恵質と土師質の2つがあります。土鈴の作り方や玉の数が違うことから、当時の人々は音の違いを楽しんでいたのではないかと考えられます。

3つ目の根拠は、太鼓を叩く埴輪が伊勢崎市にある天神山古墳から出土したことです。このことから、当時の人々は太鼓をまつりの道具として使用していたのではないかと考えられます。全国的には太鼓を叩く埴輪は少ないそうです。

4つ目は、太田市の塚廻り古墳群第4号墳から「踊る巫女」が出土したことです。このことから、当時の人々は、音楽に合わせて踊っていたのではないかと考えられます。

以上のことから、古墳時代から音楽文化は存在していたと結論づけました。

6、考察

私は今回の調査で 古墳時代に、群馬県では音楽文化が栄えていたのではないかと考えました。そう考えた理由は、群馬県の遺跡や古墳から楽人埴輪や 実際の楽器が多く出土しているからです。また、今回の調査で、琴を弾く埴輪は、群馬県から少なくとも3つ出土していることがわかっており、土鈴に関しては、全国で出土した土鈴の約3分の1が群馬県から出土しています。他にも、全国で数少ない太鼓を叩く埴輪や、踊る巫女の埴輪まで出土していることから、群馬県では古墳時代に音楽文化が栄えていたのではないかと考えました。

また、群馬県には多くの古墳があるため、儀式が行われた回数が多かったと考えられます。儀式の数が多かったということは儀式で音楽を奏でた回数も多かったと言えます。多くの儀式を行っていた群馬県では、より良い儀式を多く行うために、儀式が発達していたのではないかと考えられます。その過程で、音楽も共に進化していったのではないかと考えました。音楽が進化していたということは、使われる楽器の数が多くなり、旋律が複雑化し、現代の音楽により近くなったのではないかと考えられます。このようなことから、音楽文化が栄えていたと言えると思います。

私の考えでは、現在も群馬県は音楽文化が栄えていると言えると思います。私が卒業した小学校がある前橋市では、高学年の全児童が取り組む、マーチング・バンドというものが市内全小学校であります。これは、10月に前橋市の中心商店街で行われる、「前橋まつり」で発表されます。また、私の通っていた小学校では、「少年ばやし」という独自の踊りがあり、運動会などで発表しました。このように、音楽の授業だけでなく、楽器や踊りを積極的に取り入れている点から、現在も群馬県は音楽文化が栄えていると考えました。

7、研究の感想

私は今回の研究で、古墳時代の音楽文化について調べてきました。私自身音楽が好きだということと、春から吹奏楽部に入部しており、パーカッション(打楽器)を担当しているということから、楽しみながら調査をすることができました。個人的には、古墳時代から太鼓が存在していたことに驚きました。古墳時代の音楽文化について書かれている本や資料が少なく、調べるのは大変でしたが、かみつけの里博物館を訪問したり、実際に楽器を作ってみることでわかることが多くありました。かみつけの里博物館では、学芸員の方が、丁寧に質問に答えてくださったり、資料を持ってきてくださったことで多くのことがわかりました。かみつけの里博物館の学芸員さんには感謝しています。また、今回の研究では、実際に土鈴を作りました。初めは簡単に作れると思っていましたが、実際に作ってみるとかなり苦戦しました。苦戦しながらもなんとか完成し、土鈴を振ったときに「カラカラ」と音が鳴ったときには、喜びを感じると共に、感動しました。作ってみたいとわからないこともあり、作って良かったなと感じました。今回の研究を通して、わからなかったことが調査によってわかることの面白さに気づきました。また、あまり得意ではなかった歴史も今回の研究を通して、歴史の面白さに気付くことができ、歴史が好きになりました。古墳時代の音楽文化についてあまり知られていなかったので、古墳時代の音楽文化について多くの人に知ってもらうにはどうすればいいか、今後考えていきたいです。

8、参考文献

<文献・資料>

- ・東国文化副読本 群馬県群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会 2022
- ・鈴一よみがえる古墳時代の響きー かみつけの里博物館 2021
- ・わくわく博物館体験ブック かみつけの里博物館 2023
- ・若狭徹 はにわ: 楽しく学べる歴史図鑑 スタジオタッククリエイティブ 2001
- ・若狭徹 もっと知りたいはにわの世界: 古代社会からのメッセージ 東京美術 2009
- ・はにわ一座がやってきた。 福島県教育委員会 公益財団法人福島県文化振興事業団 福島県文化財センター白河館 2001

<Webサイト>

- ・群馬県太田市(公式)古墳時代の音 ～1500年前の土鈴～ 2024年8月12日閲覧
<https://www.youtube.com/watch?v=ivyNh7XJljl>
- ・群馬県公式デジタルはにわ図鑑 しらべるHANI-図鑑 2024年8月13日閲覧
<https://www.pref.gunma.jp/uploaded/attachment/11399.pdf>
- ・文化遺産オンライン 埴輪 太鼓を叩く男子 2024年8月23日閲覧
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/515013>
- ・文化遺産オンライン 火焰型土器 2024年8月13日閲覧
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/548373>
- ・東京国立博物館ホームページ 遮光器土偶 2024年8月13日閲覧
https://www.tnm.jp/modules/r_collection/index.php?controller=dtl&colid=J38392
- ・3埴輪男子倚像 2024年8月19日閲覧
<https://www.go-isesaki.com/hist/syosi/03haniwa/3haniwa.htm>
- ・松伏町公式動画チャンネル 土鈴をつくろう！ 2024年8月15日閲覧
<https://www.youtube.com/watch?v=o6cWfTWpIU>